

R18-G

18歳未満の
閲覧・購入禁止

燐 煌 天 使

フ エ イ ス テ ィ ア

—体験版—



Character



リン

盗賊を生業とする少女。敗戦国の戦災孤児であり、家族を死に追いやったプロモスに恨みを持っている。占領軍の略奪目標である『聖杯』の横取りを目論み、聖イリス修道学園に潜入する。



フェイスティア

リンが『聖杯』の力で天使に変身した姿。使命よりも天使の力を持ち逃げすることばかり考えている未熟者。生来の運動能力の高さとセンスの良さとで悪魔に対抗していく。武器は二丁拳銃とナイフ。遠近どちらでも戦える。



レニ

聖イリス修道学園に在籍し、聖女と崇められる信心深い女子生徒。両腕・両脚を欠損し、その上で眼球まで摘出された痛ましい姿をしている。神の子の教えに忠実で、耐えられない苦しみは無いという信念を持つが享乐的な一面も垣間見せる。



フェイスリーブ

レニが『聖杯』の力で天使に変身した姿。欠損していた手脚と目が再生し、戦闘が可能となる。身体には無数の傷跡が残ったまま。戦闘経験が豊富な手練だが、悪魔に陵辱された回数も数知れず。レイピアを武器とし、スピードで敵を翻弄する。

- イリス ••• 学園長。『聖杯』を管理し、天使たちに命令を下す。
プロモス ••• 占領軍の管区司令。略奪と強姦で私服を肥やしている。
タンタル ••• プロモスの手足となる部下。己の野望を秘めている。

Contents (体験版につき第Ⅰ章までの収録となります)

プロローグ	… 4
第Ⅰ章 盗賊少女リン	… 12
第Ⅱ章 聖女レニ	… 44
第Ⅲ章 魂の裏切りの夜	… 90
第Ⅳ章 自由な墮天使	… 132
エピローグ	… 168
設定資料集&あとがき	… 174

この物語は成人向けです。
18歳未満の閲覧を固く禁じます。

この物語には出血や欠損・暴力などのグロテスクな表現があり、
それらに興味の無い方や嫌悪感・不快感を覚える方の閲覧はご遠慮下さい。

この物語によって生じる影響およびそれらがもたらす結果については
執筆者は一切責任を負いかねますので予めご了承下さい。

この物語に登場する人物・団体名は全てフィクションです。
また、作品中の犯罪行為および描写は全て架空のものであり
犯罪行為を模倣させる、あるいは助長するためのものではありません。

プロローグ

星も見えない夜のこと。聖イリス修道学園の鐘楼しやうろうに一匹の悪魔が羽音と供に降り立った。

獣の如く突き出た口と大きな角、筋骨隆々の巨軀…… 恐ろしい風貌のそいつは敷地を見回し、人間の気配がまったく無いことを察知した。ここは全寮制の宗教学校で人里離れた山奥にある。だから生徒や教師が居る筈だが――

「外、にあるホン、モノ、の学園、そ、つ、く、りだ。やはり『結界』内部は現世から隔絶されているということか…… 人間を血祭りに上げる楽しみが減、ち、ま、ったが、目的は聖杯だからな」

口端を持ち上げた悪魔は鐘楼から地面へ飛び降りる。上から確認した限り、聖杯が安置されていそうな建物はひとつしかなかった。学園の中心に聳える聖堂である。そこからは背筋が凍る神聖なオーラが溢れていた。

悪魔は途中で立ち止まる。聖堂の扉の前に小さな人影を見つけたのだ。年齢は十歳半ば、シスターの服を着て、フードの下から長い金髪をのぞかせた美少女である。

「止まって。ここは、あなたのような悪魔が来る場所じゃない」

大した度胸である。体格差でも三倍はあろうという悪魔を前にして、少女は全く怯えた様子が無い。堂々とした態度は自信に裏打ちされているようだ。

「おい、ガキ。調子に乗るんじゃないぞ。ここには聖杯ってすげえアイテムがあるんだろ？ 大人しくそれを差し出せ。従わないと手脚をへし折って、ケツの穴をプチ犯すぞ」

「それが目当て…… 聖杯は絶対に渡さない。神に仇成すあなたを浄化する」

「はははっ、やってみろ！ 俺こそは刃の悪魔！ 千刃をもって血の雨を降らす…… 刃、の悪魔、だあ！」

咆哮と供に、悪魔の両腕の肉が盛り上がり、骨が形を変える。あっという間に両腕が鋭い剣と化した。

少女は動じず、胸の前で手を組んで祈りを捧げ始める。悪魔の動きなどまるで意に介していないようだった。その小さな身体は煌めく光を宿してく。

「聖杯よ。繰り返す信仰の力を私の胸に…… フェイスアップ・リープ!!」

涼しげな声音で紡がれた呪文は力強い風を引き起こした。悪魔の巨軀は吹っ飛ばされ、近くにあった建物の壁に突っ込む。

身に纏うシスター服が爆ぜ、清らかな裸体を晒すと虚空から現れた光の帯がそれを優しく包んだ。光は純白の衣へ変化したし、同時に少女の金髪は空のような青さに染まっていく。肌も露わな新しい衣装は神々しく、その胸には櫻十字の形をした真つ赤な紋様が浮かび上がった。

「まさか…… 人間が天使に転生しやがったのか!」

眩い光の中で華奢なシルエツトが立ち、刃の悪魔はその迫力に後ずさりしてしまった。少女が虚空を撫でると細身の剣が生まれ、舞踊の如く優雅に柄を握る。

「りんせいでし 憐惻天使フェイスリーブ。穢らわしい悪魔。逃がしはしないよ」

「けっ! 娼婦みてえな薄着しやがって! いい気になってるんじゃない!!」

悪魔が両腕の刃を高速で振り下ろすと、空気が破裂したような音が辺りに響いた。フェイスリーブと名乗った天使はその一撃に切っ先で触れ、いとも簡単に軌道を変えてしまった。呆気にとられる刃の悪魔だったが体勢を立て直せず、無駄に地面を扶る。その間にフェイスリーブは千を超える突きを繰り出し、悪魔の皮膚を裂いていった。

「ぐああああっ!! い、痛てえっ!! よくも、よくも、よくもお!!」

真つ青な血が噴き出し、よろめいた悪魔が後退する。武器と一体になった腕は痛めつけられ、振り上げるのも困難になっていた。

その後は一方的にフェイスリーブが攻撃を繰り出していく。悪魔の怒りは空回りし、捨て身で放った斬撃もあっさり見

切られた。

顎を下から狙うように細身の剣を突き付けられ、ついに悪魔は動きを止める。

「み、見逃してくれえ…… 後生だ。頼む。俺は、もともと人間なんだよ……」

「そんなわけないよ。悪魔は悪魔」

フェイススリーブは眉を吊り上げて険しい表情を見せる。だが、切っ先は僅かに下がっていた。悪魔はそれを見逃さない。

「本当だって。ほら、見てくれ」

「!？」

肉の線維が解けるように、獣じみた悪魔の顔面が崩れる。中からは人間の男の顔が現れた。そいつは怯えながら頬をひくつかせ、視線を泳がせている。

「悪魔にたぶらかされたんだよ。魂を売れば、お前も悪魔になれる……って。だから俺は人間から悪魔になった。そうやって魂を売った人間が他にもたくさんいる」

「……」

「こんなクソみたいな時代だ！ 戦争に、飢餓に…… 俺だって、こんな風になりたかったわけじゃない！ ワケありなんだよ！ 生きていくためには仕方なかったんだ！」

「……帰って。聖杯を諦めるなら見逃してあげる」

「ホントか!？」

「二度は言わないよ」

フェイススリーブは憐れみの目で剣の切先を僅かに下げた。その刹那、悪魔の中身の男は口端を持ち上げて笑う。

「っ!？」

企みに気付いたフェイススリーブは距離を取ろうとしたが遅かった。悪魔の身体からのあちこちから無数の刃が生えて、

巨大な針山へと変化したのである。密集した攻撃は避けようがなく、フェイスリーブの右手首と左脚が斬り落とされる。

「きゃああっ!？」

「バカめっ! かかったな!」

天使の顔が恐怖で青褪めた少女のものへと変わった。悪魔はその隙を見逃さない。バランスを崩した華奢な肉体を狙い、両腕の刃を突き立てる。今度は少女の左の二の腕と右脚が切断された。

四肢を失った少女はあえなく地面に落下し、信じられないといった表情で固まっている。

「あっ…… あっ……」

どうにか絞り出した声は震え、立ちあがろうとした。だが、視界の端に切断された手脚が見えると絶望のあまり嗚咽を漏らしてしまう。剣を振るうどころではない。逃げることもできない。

悪魔は全身から突き出た刃を引っ込めると、晒していた人間の顔を肉の奥へと仕舞う。

「言っただろ。千刃を成す……ってな。お前、能力は高いのに戦闘経験が浅いなあ。だから敵の戯言に耳を傾けちまって、挙句このザマだ」

「ひ、卑怯者……」

「なんとも言えよ。おっと、天使ってのはすげえな。手脚を全部切り落としても死ぬ気配が無いときたもんだ」

「私はまだ負けてない。こんな…… 贖罪も終わらないまま負けるわけにはいかない!」

「天使のお嬢ちゃんよお。だったら、完全敗北ってのを味わってみるか?」

「えっ……?」

刃の悪魔はおもむろにフェイスリーブの頭を片手で掴んで持ち上げる。もう片方の手で純白の衣に爪を立て、菓子包装を剥くみたいにビリビリと破いた。

「きゃっ!？」

「いかにもガキって身体付きだなあ。ちゃんと食ってるのか？ ガリガリに痩せてるじゃねえか。おっ？ マン毛が生えてねえ。ははっ、パイパンだったのか」

「あ、悪魔には関係ない！ 見ないで！」

「ぶった斬った手脚の血が止まってやがる。もう再生し始めてるのか。反撃されねえうちに味見しちまおう」

「なにを…… あっ!？」

フェイススリーブの視線が留まった先には聳り立つ悪魔のペニスがあった。並の太さではない。それこそ馬のものよりも太くて長かった。

悪魔はフェイススリーブの身体の位置を調整し、肉棒の真上に持つてくる。ピタリと閉じた割れ目に凶悪な鈴口が触れた。

「まさか……」

「そのツラ、その反応…… ちゃんんと処女だよな？ 親切に教えてやるが、マンコ濡らしておかないと裂けちまうぞ？」

「い、いやあっ!？ やめて!! そんな大きいの入るわけない!!」

「大丈夫だって。腹を突き破っても傷口は勝手に塞がるんじゃないか？ 天使ってのがどれだけ頑丈か試してやるよ」

「いやあああああっ!! い、痛いっ!?! アソコがあ…… ペニスでぐいぐい広げられているっ!?!」

肉槍がフェイススリーブの膣口を無理矢理広げ、ずぶずぶと先へ奥へ進んでいく。普通の女であればそれだけで腹が破れているところを、皮肉にも天使の身体は耐えてしまった。

陰唇の裂ける音がフェイススリーブの耳に届き、尋常ならざる痛みで気が遠くなる。どこまで男根が入ってきたのかは腹を見れば一目瞭然だった。ヴァギナが広がった分だけ内臓が押し潰され、皮膚が伸びて腹が膨らんでいる。臍など裏返ってしまいうさだった。あまりの太さに股関節が碎けてしまう。

「ひぎいいいいいい!! わ、私のお腹があっ!?!」

肉棒はとうに子宮口に達している。悪魔はそれでも挿入を止めなかった。無理に押し込み続けた結果、フェイススリーブ



の子宮は亀頭に潰されてただの肉片に成り果てる。

女の部分を守るために愛液がとめどなく溢れるも、子を成す器官は全滅してしまった。接合部からは血と共に虚しくメス汁が垂れ流れ、悪魔のペニスを潤滑している。

「はっはっはあっ！ 流石は天使だ！ 普通の女なら挿入ただけで死んじまうんだが、しっかり耐えてるじゃねえか！」
「いいいい痛いいいいっ!? わ、私のオマンコがあっ!? オマンコが壊れたあっ!?」

「おいおい、ちょっとは色っぽく鳴けよ。品の無いガキめ」

「ひいいっ!? ペ、ペニス振じ込まないでえ!? それ以上、入れられたら死んじやうううう……!!」

「あー、キンキンと喚きやがって。しかし、ひでえガバマンだな。一気にやりすぎちまったせいでもう締まらないみたいだな」
悪魔はフェイスリーブの胴体を掴んで肉棒を圧迫し、上下に動かしてシゴいてみる。ヌルヌルに滑ってはいるものの、肉褻の感触や締め付けは皆無であった。突く度にフェイスリーブの腹は亀頭の形に膨れ、なかなか愉快ではある。

「オラっ！ 少しは自分で締め付けてしろ！」

乱暴に掴んだそのとき、悪魔の爪がフェスリーブの右目に入った。眼球は何の抵抗もなく潰れ、頬に血の涙が流れる。

「ひぎいっ!? 目があっ!?」

「おっ、今ちょっと締め付けたな。もしかして目を潰すと感じるのか？」

「見えない!? 目があ、目があ……!?!」

「うるせえな。まだ左目が残っているだろうがよ」

パニックになってフェイスリーブが暴れると、右目を潰した爪が抜けて大きく皮膚を抉る。恐慌状態の彼女は泣き叫んで逃げようとするが、手脚を失い、肉槍に貫かれたままでは徒労にしかならなかった。

「そろそろ射精してえんだが、これじゃオナホ天使だな。ま、そのガバマンで最期にもうひと締めしてくれや」

残った左目の瞳孔に悪魔の爪が触れた。ほんの少し力を入れればフェイスリーブの眼球は抉られてしまう。

「や、やめ…… やります！ オマンコ締め付けますから、やめてえっ!!」

懇願するフェイスリーブだったが、膣を閉じることができなかった。脚の筋肉は切断されているし、腹の中身もグチャグチャに潰れている。泣き叫ぶ肉袋でしかない天使を嘲笑いながら、悪魔は少しづつフェイスリーブの左目を潰した。

「い、痛いいのお…… 見えない、何も見えない……」

「ふん、大して気持ちよくもねえな。シゴいてフィニッシュだ」

胴体を掴まれ、身体を上下に動かされたフェイスリーブはただの性玩具に成り下がる。そのまま抑揚もなく、悪魔は大量の精液を胎内に吐き捨てた。子宮も内臓も掻き混ぜられたフェイスリーブは泣き叫びながら「やめて」と繰り返す。股間の接合部からは白濁が溢れ、ただでさえ膨れていた腹は破裂寸前の風船のようにパンパンになった。

天使の穴から肉棒を引き抜き、聖堂の扉に向かって叩きつけてやる。両目を潰され、四肢をもがれてなお天使は生きていた。扉で跳ね返って地面に転がり、精液塗れで嗚咽を漏らして震えていた。

これ以上、構っていても時間の無駄である。そう判断した刃の悪魔は、腕を武器に変形させた。

「さて聖杯をいただくでしょう」

千の刃と化した悪魔が扉を壊そうと奮戦する。巨大な針山は回転しながら激突を繰り返したが、「扉に傷ひとつ付けられない。時間だけが無駄に過ぎていった。周囲の壁に至っても同様に頑丈である。

傍に転がるフェイスリーブは「お母さん」とうわ言のように呼びかけ、そのうち苛立ちを募らせた悪魔に背中から踏み潰されてようやく黙った。

「……なるほど。俺ひとりの力じゃ壊せないってことか。なあ、お前は開け方を知っているのか？」

足の裏ではカエルの如くフェイスリーブが潰れている。彼女は必死に首を横に振って「知らない」と訴えた。

刃の悪魔は溜息をつき、背中を羽を広げる。何度か羽ばたいてからフェイスリーブの髪に唾を吐いた。

「まあ、いい。『結界』への入り方は分かったんだ。扉を突破するのは次の機会にしてやる。じゃあな、未熟なクソ天使」

第I章 盜賊少女リン

#1

とある街の中心に建てられた豪華な屋敷は、先の戦争によって所有者が変わっていた。以前から街に住む者は新たな主を決して認めることなく『占領軍』と侮蔑している。その怨嗟の声で異国の軍人たちを追い払うことはできなかったし、ましてや書き換えられた国境を元に戻すこともできなかった。

『占領軍』は略奪しようが強姦しようが咎められることはない。奴らを刺激しないように住人たちは皆、下を向いて歩いている。

そんな鬱屈した現実をぶち壊すように、夜の屋敷に警報が鳴り響いた。

「見つけたぞ！ 薄汚い盜賊め！」

「何度も何度も！ 舐めやがって！」

怒声と共に異国の軍服を着込んだ兵士たちが庭園に集まってくる。

サーチライトが屋敷の尖塔を照らし、小さな人影を捉えた。

そいつは軽い身のこなしで別の屋根に飛び移り、姿勢を低くして走り出す。

「逃すな！ 撃て！ 撃て！」

夜闇に銃火が輝き、人影の足元に穴を開けていく。だが当たった様子はなく、どんどん屋敷の外の方へと逃げていった。同じく屋根を伝って後を追う兵士もいたが、バランスを取るだけで精一杯だったり、途中で落ちたりと散々である。

「くそっ！ なんて身軽なヤツなんだ！」

「なんとしても捕まえろ！ 殺してもいい！」

ついに人影を見失い、いくつものサーチライトが交差しながら辺りを探った。

そんな中、右往左往する兵士たちを太い腕で退ける大男がいた。

奥まった目は鷹のように鋭く、人影が消えた屋根の上を睨んでいる。

「た、タンタル中尉!? 中尉が出るまでもありません！ ここは我々が……」

「うるせえ！ 賊はプロモス管区司令の執務室を荒らしたんだぞ！ 接收品の宝石の他に、機密の作戦書も盗まれている！」

「そんな……」

「お前らみたいにノロノロやっていたんじゃ取り逃しちまう！ 無駄に追跡せず、屋敷の外壁の外を兵で固めろ。先に出口を塞いでしまえ！ それから許可するまで発砲するな！ あとは俺がやる！」

「しかし、盗賊は高い場所に……」

「俺の命令を聞けないってのか!?!」

「はっ、直ちに！ おい、壁の外を囲め！ タンタル中尉の命令だぞ！」

リンは地上の混乱を尻目に、サーチライトをかわしながらほくそ笑む。尖塔の天辺から敵の配置は確認したので、手薄な箇所を狙って走っていた。屋根の上の不安定な足場をもとめせず、飛び交う銃弾は「どうせ当たらない」と覚悟を決めて恐怖を呑み込んでいる。

外套の下には戦利品をたんまりと入れた雑嚢を背負い、その重さの分だけスピードが落ちていた。盗みの最中に運悪く見つかったのは想定外だが今回もどうにか逃げきれそうだ。

そう踏んでいた矢先、屋根の端から巨大な影が躍り出てくる。

「ふんっ！」

「うわっ!？」

自分の倍近い体躯の大男だった。そいつが天から拳を振り下ろしてくる。

どうにか身を振ったリンは肝を冷やしながら攻撃を回避した。そのまま来た道を下がったが足は止まってしまふ。対峙してみると大男は異様な殺気を放っており、視線を逸らした瞬間に背中からバラバラにされそうだった。

「随分とすばしっこいと思つたら、女かよ」

屋根から拳を引き抜き、呆れたようにリンを見下ろしてくる。

距離はあれど油断すれば一気に詰めてくるだろう。そう確信できるほど、大男の運動能力は高い。

「しかもガキじゃねえか」

「そういうあんたは随分と身軽なオッサンね」

「オッサンじゃねえ。タンタル様と呼べ、占領地の家畜め」

「あれえ？　ここで一番偉いのはプロモスって豚野郎じゃなかったっけ？」

憎まれ口を返してやると、タンタルと名乗った大男は舌打ちする。

屋根の上は狭い。バランスを崩して落ちて都合よく落ちてくれと願うリンだったが、タンタルは他の兵士のように間抜けではなさそうだ。

「プロモス管区司令は区外へ出掛けているんだよ。今、ここで一番偉いのはオレだ」

「あっそ」

「ここ最近、我が軍から窃盗を繰り返しているのはお前だな？　家畜風情が舐めた真似をすりゃどうなるか分かってんだろうな？」

「男なら強制労働、女なら兵士の精液便所でしょ。あーあ、やだやだ。占領軍の野蛮人が考えそうなことね」

「分かってねえな。お前たちの国はとくに戦争で負けてんだよ。ここじゃ俺たちが正規軍なんだ。それと管区司令の私物を盗んだお前は裁判無しの銃殺刑。ガキだからって容赦しねえ」

「どうせ略奪品でしょ。土地も、財産も、みくんな、あたしたちから奪っただけ。いい気になってんじゃないっての」
リンの中の怒りに火が着く。

奪われた者と奪った者。睨み合う間に火花が散ったが、五角からは全く程遠い。

狭い進路を塞ぐ巨躯の男と、下では壁に集まる兵士ども。これらを突破するのは容易ではなかった。

少なくとも見つかるつもりはなかったし、見つかったとしても一気に駆け抜けるつもりでいたのである。

(どうしよう…… すぐくマズイ…… こいつ、めちゃくちゃ強そうだし)

強気な口調とは裏腹に、焦りで冷たい汗が流れる。あくまで表面上は余裕を装っているが、躪り寄るタンタルからとてつも無いプレッシャーを感じていた。

「ね、ねえ。もしも盗んだものを大人しく返すって言ったなら、どうする？」

「バカか？ それで処遇が変わるわけねえだろ」

「だよねえ。ところでさ、なんであなたは拳銃を使わないの？」

「……そんなのはオレの勝手だろうが」

ほんの少しではあるが声の上擦った。リンはそれを聴き逃さない。

タンタルの軍服のベルトには拳銃がぶら下がっているが、それを抜く気配が無いのだ。

「こんな場面なのだから銃口を突き付けるか、もしくは撃ってしまう方が手っ取り早い。

「あー、もしかして…… あたしが盗んだものの中に、絶対に傷つけちゃいけないお宝が混じってるってこと？ だから撃たないんだ。あたしが屋根から落ちたら困るから」

さらに距離を詰めてくるタンタルは、両腕を広げていた。

飛び込めば一気にリンを押さえられる。そうしたいという意志が読み取れる。

リンは外套の中で雑嚢を掴む。そこには、さっき盗んだ品物がたんまりと入っていた。

(命には替えられない。ここで死んだらダメ)

「うるさいガキめ。黙って盗んだものを返せ」

「凶星ね。ま、お宝が傷付けば豚野郎に怒られるんだらうけど。下っ端は辛いわね」

「このっ……!!」

挑発に乗ったタンタルが踏み込んでくると同時に、リンは雑嚢の紐を緩めて投げ付けた。

貴金属や宝石の礫を喰らった大男は目を見開き、動き止める。

バラバラと赤、青、緑の鮮やかな石やら黄金色のネックレスやらが屋根を転がり落ちていった。下にいた兵士たちからは歓喜の声が上がる。

「宝石だ！ 宝石が降ってきた！」

「拾え、拾え！」

「バカどもが！ それが誰のものか分かっているのか!?」

大声を上げるタンタルを尻目に、リンは雑嚢を拾って屋根の反対側から飛び降りる。

「狙い通り、兵士たちは宝石がばら撒かれた方に集まり、手薄になっていた。」

「逃すか!!」

「えっ!？」

落下の最中、リンへと伸びるタンタルの手が妙な形に変形した。

だが、それを見届けるよりも早く庭木の枝に引っ掛かる。

(なんだったの今の?)

確認している暇はない。木から降り、全力で走って屋敷の敷地を抜けたリンは静まり返った夜の街中へ出た。

追手の兵士を撒くのに時間はかかったが、太陽が昇る頃には安全な場所まで逃げられた。セーフハウスとして確保しておいた郊外のポロ小屋に入り、ようやく腰を下ろす。

「はあ、死ぬかと思った……あのタンタルってオッサン、元気過ぎでしょ……最後のアレはなんだろう？ 目の錯覚だったのかな……」

懐から好物の砂糖菓子を取り出し、口に放り込んで雑嚥の中身を確認する。甘い味が広がる満足感と、せつかくの獲物が目減りした悲しみが同時に押し寄せてくる。

雑嚥の中に残っていたのは僅かな宝石とヨレた紙束である。

「大事そうに保管されていたから盗んでみたけど、何これ？」

表紙に『聖杯奪取作戦』と書かれた紙束をペラペラめくってみる。

内容は占領軍の次なる略奪について。

読み込むうちにリンの口端が持ち上がる。

「へえ…… 聖杯ってのが占領軍の重要機密目標ねえ」

作戦が行われる場所は聖イリス修道学園という宗教学校のような。そこに安置されている聖杯という遺物を略奪するつもりらしい。実行予定日まではまだ時間がある。

具体的な写真などは添付されていなかったが、おそらくは骨董品の類だろう。

リンはほくそ笑んで、さらに砂糖菓子を口の中に放り込む。今度は転がさず、歯で噛んで砕いた。甘さはすぐに舌の上で溶けて消えてしまう。

「この聖杯ってお宝を横取りできれば、豚野郎のブロモスに一泡吹かせられる。……やってやろうじゃない」

目的の学校は人里離れた山中にあった。学舎として使われている建物群は古代の城塞であり、それらを改装したらしい。

(ここが聖イリス修道学園かぁ…… 占領軍の狙っている聖杯が隠されているワケね)

荷運び人に扮したリンは特に疑われることもなく学園の門を潜ることができた。

背負った荷物は調味料やちよつとした道具で、近隣の街からここまでの道のりの負担となっている。変装の道具としては凝っている部類だろう。それらを担いだまま学内を彷徨うろたいてみた。

もともと城塞だったため壁は高く、敷地をぐるりと囲っている。だが一部は崩れて穴が空いており、外部との出入りは容易だった。敷地内には畑や畜舎もあり、ある程度は自給自足して生活していることが伺える。

(潜入成功。余裕ね)

主な建築物は学生が寝泊まりしていると思しき宿舎、少し離れた場所にある食堂、背の高い鐘楼、それから学舎……いずれもボロくて修復跡が目立つ。

途中で生徒たちも見かけた。黒い制服に楔十字のペンダントを下げた女子が楽しそうに笑い声を上げている。みんなリと同い年くらいだろう。

ここは修道女を養成する機関で、教師に至っても男性は一人として在籍していないらしい。

「こんなド田舎で、いもしない神サマにお祈りして何が楽しんだか」

リンは呆れながら盗んだ作戦書に目を通す。建物の大まかなレイアウトが書かれており、聖杯の在処もバツ印で示されている。

(ここか)

辿り着いた先は学園の中心にある聖堂だ。他の建物とは違って立派な造りをしている。幸いなことに人の気配は無く、

扉には鍵がかかっている。荷物を背負ったリンは堂々と内部へと入る。途端に、ひんやりとした空気が頬を撫でた。

(見た目はどこにでもありそうな礼拝施設だけど)

聖堂の中には長椅子が並べられている。その間を真っ直ぐに歩くと、正面の壁はステンドグラスになっていて、その手前には楔十字のオブジェクトが掲げられていた。言わずと知れた宗教的シンボルである。

(へえ…… 古いだけあって雰囲気あるわね)

一瞬だけ、敵かな気持ちになってしまった。盗みを働こうとしている思惑が神様に見透かされたように感じ、後ろめたさが込み上げてくる。

抗うように頭を振って心を冷ました。所詮は場の空気だけ。こんなまやかしは通用しない。

「神サマなんているわけないし」

「本当に、そうかな？」

「っ!？」

誰もいないと思いついていたリンは唐突な声に驚いて飛び退いてしまった。長椅子の最前列には人がいたのである。それもリンのすぐ真横だったのにまるで気配を感じなかった。猫のように毛を逆立てたリンに睨まれ、その人物は視線を受け流して笑う。

「こんにちは」

正体は黒い制服を着た少女である。この学園の生徒に違いない。挨拶されるもリンは完全に硬直している。何故なら、その少女の異様さに言葉を失ってしまったから。

(なに、この娘?)

その女の子が座っているのは長椅子ではなく、車椅子だった。木製のフレームに大きな車輪を備えている点は一般的なものと変わらない。しかし、車輪を回すためのハンドリムと足を置くためのステップが無かった。それらが必要ないから

取り付けられていないのだと気付き、リンの背筋が寒くなる。

少女は左右両方の二の腕から先が無かった。加えて左右両方の大腿から先も無かった。そのせいで小さく見える身体には幾重にもベルトが巻かれ、車椅子から落ちないように括り付けられている。

さらに目の周りには包帯が固く巻かれていた。

「こんにちは」

「こ、こんにちは……」

「あなた、この学園の生徒じゃないね」

「え？ 包帯の下から視えるの？」

「視力は無いよ。でも、あなたは知らない匂いと声だったから」

「あ、あたし…… 荷運びなんだ！ ここに来るのは初めてで、どこに納品すればいいか分からなくて……」

「そうなんだ」

「ねえ、あんた。その手脚と目は……」

「これ？ これは悪魔の仕業」

聞くんじゃないなかつた、と後悔が込み上げてくる。見るからに痛々しい姿の理由なんて知る必要もなかつた。リンはギュッと拳を握り込んで俯く。

（悪魔…… 占領軍の奴らめ）

奴らから不穏分子と見做された者は拷問にかけられ、ありもしない罪を自白させられるのだ。男であれば馬車馬のように働かされ、女であれば孕んでなお精液便所にされる。遊びで手脚や目を潰されるといふ話も聞いたことがあった。

眼前の欠損少女がその被害に遭ったのかと思うと胸が苦しくなる。

「ねえ、少しお話ししない？ 私、外の人とあまり話をしたことがないの」

「……うん、いいよ」

本当はモタモタするべきではない。それは十分に分かっていたが、後ろめたさを感じたリンは荷物を下ろして長椅子に腰掛ける。ステンドグラスの前に鎮座する大きな楔十字を見上げると気分はさらに沈んでしまった。

「さっき、神様はいないって言ったよね。どうしていないと思うの？」

「こんなに苦しんでいる人がいっぱいいるのに助けてくれないでしょ」

「そうかな。神様はね、その人が耐えられる苦しみをしか与えないんだよ」

ピクリと、リンの眉が持ち上がる。同情する気持ちがスーッと消えていくのを自覚し、湧き上がる激情を抑えようと呼吸を整えた。盗む前の偵察の段階でトラブルを起こしたくはない。そうやって自制する。

「じゃあ、例えばだけど戦争の苦しみて、耐えられるの？」

「きつと、そうだよ」

「あんたのその手脚と目も……？」

「これは神様が私に与えたものだからね」

「奪ったんじゃないくて？」

「うん」

「じゃあ余計に神サマがいるなんて信じられない」

哀れみと怒りが複雑に絡み合い、リンの中で処理できなくなっていく。辛うじて自分と、この欠損少女が決して相入れない存在だということとは理解できた。

（あたしは痛みを一方的に受け入れるなんて、絶対にイヤ）

やったらやり返す。でないと一方的にやられたままだ。その信念を抱いて、ここにいる。

しばらくは沈黙が続いた。お互いに何を話せばいいか分からなくなったのである。

「あなた、甘い匂いがするね」

「……そう？ あっ、もしかしてこれかな」

リンは懐から袋入りの砂糖菓子を取り出す。疲れを取るのに重宝するからと、いつも持ち歩いているのだ。甘い匂いが強くなって少女の鼻が少しだけ動く。

それから袋の方へ顔を寄せてきた。

(こんなトコで禁欲生活してるから、甘いものなんて食べる機会ないのかもね)

ほんの少しだけ微笑ましくなる。

甘いものを欲しがると気持ちならリンにも理解できた。

「砂糖菓子、食べる？」

「いいの？」

「あんと話せてよかったよ。食べさせてあげるから、口開けて」

砂糖菓子を摘んで近づけてやると欠損少女は「あ〜……」と口を大きく開けた。滑りを帯びたピンク色の唾内が艶かしく、リンの中で不思議な羞恥心が生まれる。

次の瞬間、少女の長い舌が砂糖菓子を捉え、そのままリンの指先ごと呑み込んだ。

「ひいっ!？」

「んじゅっ♡ ちゅる……」

ゾクリとして身体が跳ね上がった。

背筋が冷えたかと思うと、ヘソの下あたりが対照的に熱を帯びる。

味わったことのない感覚にリンが戸惑っていると、欠損少女は砂糖の粒が付いた指先まで丹念に啜え込む。

「ちゅる、ちゅるぼっ……んちゅっ♡」

唾内の生温かさが伝わり、じゅぼじゅぼと官能的な唾の音が耳を犯してくる。恥ずかしさのあまり動けなくなったリンは得体の知れぬ快感に悶えた。

そんなことはお構いなしに欠損少女は舌を出し、しなやかな指を舐め上げた。

砂糖菓子はもう欠片ほども残っていない。代わりに、リンの指と少女の唇の間で唾液が糸を引いていた。その糸を少女が嚙下する。

「ぢゆる♡ んん、ぢゅ……♡」

この上なく動物的で、品性を欠き、見るに堪えない光景である。

だが目を離せなかった。リンが顔を真っ赤にしていると欠損少女はペロリと自らの唇を舐め、妖しく笑う。

「罪の味がする」

「そ、そう…… よかったら袋ごとあげる。後で誰かに食べさせてもらおうといいわ」

ハンカチで指を拭い、砂糖菓子の入った袋を膝の上に置いてやる。これ以上、この少女の前にいたらおかしくなりそう。そそくさと退散しようとしたが、その前に呼び止められてしまう。

「待って。私はレニ。あなたの名前を教えてください」

「……えっと、リン」

「素敵な名前ね。また会える？」

「次に納品に来たときに、多分」

そんなことはあり得ない。

荷運び人は仮初の姿であり、聖杯さえ手に入れてしまえばこんな学園に用はないのだ。

リンの心中とは裏腹に、レニと名乗った少女は嬉しそうだった。

「そう。またね」

レニと別れたリンは学園内で情報収集を続け、目的の聖杯が聖堂に安置されていると確信した。

その後、一旦は学外へ出て夜になるのを待ち、聖杯を盗み出す計画を実行に移す。

正門の門は閉ざされていたが事前に確認した通り、敷地を囲う壁は穴だらけだ。

(「丁寧には、占領軍の作戦書には侵入ルートまで書いてあったのよね。しかも時間帯まで指定してある。必ず夜、太陽が登り切る前に……だっさ」)

月明かりの下で盗み出した作戦書に目を通す。わざわざ遠回りして忍び込むような経路になっているのは疑問だ。軍隊で正面から門を破った方が手っ取り早そうなのに。

しかし、単独で行動するリンにとっては好都合である。

占領軍のプランをなぞって壁に空いた穴——というには随分と暗くて深いような気もしたが——を通過して敷地に入り、足音を忍ばせながら聖堂へ近付く。

その途端、冷たい視線を感じた。

「誰!？」

汗が吹き出して辺りを見回すが人影は見当たらない。心臓が落ち着くまで待ったが、誰も現れなかった。

(気のせい? 誰かに見られてる? 神経質になっただけかなあ)

盗賊を生業としているリンは他人の視線には人一倍、敏感だった。そうでないと盗みなんて成功しない。

吹き付ける風の音以外に何の音もなかった。ここで立ち止まっているわけにも行かず、移動を再開する。

学舎の方に目を遣るが灯りひとつ点いていなかった。就寝時間を過ぎているのだろう。

(うーん、こんなに静かだなんて変だなあ……)

リンは奇妙なことに気付いた。宿舎の近くを通りかかっても、全く人の気配がしない。これまでの経験と照らし合わせても違和感がある。

大勢が住んでいれば真夜中であろうとも何かしら物音がする。目を覚ましたものがベッドから立ち上がったたり、あるいはイビキが聞こえたり……この学園にはそういったものが一切ない。勿論、誰もいないなど有り得ない話だ。

不思議に思いながらも聖堂の前へ辿り着いた。当然のように施錠されている。

閉ざされた扉を開けるなど朝飯前。タカを括っていたリンだが、ピッキングツールを鍵穴に突っ込んだ時点で額に汗が浮かんだ。

鍵にまったく手応えがない。穴の中は空洞になっていて、道具の先端が引っかかる場所が無いのだ。

「なにこの鍵!？」

穴を覗き込んでみるも、暗くてよく分からない。細い木の枝を拾って鍵穴に放り込んでみるとスルスルと中へ落ちて消えてしまった。

仕方なく、扉に張り付いてあちこち調べてみる。そこでも奇妙な現象が観察できた。手触りが金属でも木でもない。陶器のように滑らかなのに温度も感じなかった。いよいよ薄気味悪くなり、扉と距離を取る。

「まいったなあ。他に侵入できそうなところってあったっけ？」

占領軍の作戦書に目を通してみるが、聖堂の鍵については何も触られていない。その代わり、走り書きが気になった。最初は暗号か何かだと思っていた一文である。

「えっと『天使を折れ』って、どういう意味？ 作戦書なんだから具体的に書きなさいよね……」

毒づいていると、上空からバサバサと羽音が聞こえた。最初は無視していたがリンと月明かりの間に大きな何か割って入り、暗い影が落ちた。

リンが顔を上げると視線の先には——翼を生やした人影が飛んでいる。

「なっ……!?!」

一瞬、コウモリかと思ったが大きさが全然違う。明らかに人の形をしていて、その背中から羽が生えているのだ。顔は獣のように鼻が突き出っていて、額からは禍々しいツノが伸びているではないか。

(まるで悪魔……)

唐突に現れた異形にリンが驚いていると、そいつは濁った目を細めて着地する。身長は2メートル以上あって、両腕が異様に太かった。

「ほう、お前がこの『結界』を守る天使だな？」

「あ、あたし？」

低い声で呼びかけられ、息が止まった。見るからにヤバイ生物だが人語を話したことにより、意思疎通の可能性を感じる。一方で身体は正直であり、本能的な危機を感じ取ってジリジリと後退していた。

「早く変身しろ。そして我と戦え。我こそは拳の悪魔！ 天使を斃し、聖杯をいただく！」

「いやいやいや、人違い！ あ、あたしは天使と違って大層なモンじゃないし！ 聖杯が欲しいなら勝手に持って帰ってどうぞ！」

リンは口では目的を諦めていたが、外套の下ではホルスターに仕舞った拳銃へ手を伸ばしていた。悪魔と名乗ったデカブツからは見えていない。攻撃の気配を察知されないように慌てた様子を演出する。

もしも言葉で敵意を逸せるなら上等。襲いかかってくるのであれば銃弾を撃ち込む。

二段構えのリンは愛想笑いを浮かべるも、拳の悪魔は冷淡に見下ろすだけだった。

「卑しい面構えだな。なるほど、天使でないというのは本当のようだ」

「そうそう、だからあたしなんかには構わず……」

「虫ケラに用は無い。死ね」

「っ!!」

膨れ上がった殺意がリンを貫く。恐怖で失禁しそうになったが、それよりも早く銃を抜いた。トリガーを引いて合計で三発、拳の悪魔の喉と胸と脇腹に命中する。しかし、小さな穴を穿ただけで痛がっている様子もない。

「そんな豆鉄砲が我に効くともっ？」

「くそっ！」

踵を返したリンは全力で走り出した。残る手持ちの武器といえばナイフだけ。拳銃が通用しない相手に効くとも思えない。

そうなると逃げるしか選択肢がなかった。判断としては正しかったが、相手それを許してくれなかった。

「ふんっ!!」

低い唸りと共に風が吹いた。

拳の悪魔がその場で巻き込むようにフックを放つと、真空が生まれてリンの爪先が浮いてしまう。

「なによそれ!？」

逃げ出そうとしていた筈なのに、拳の悪魔の元へ吸い込まれたリンは涙目になった。次の瞬間、視界すべてが拳に埋まって意識が飛ぶ。

吸い寄せられたリンは拳の悪魔が放ったストレートをモロにくらい、ぶっ飛ばされて聖堂の扉に突き刺さった。凄まじい衝撃で骨肉は潰れ、破裂した内臓からは真っ赤な血が流れて吐き出される。一方、扉には傷ひとつ付いていない。

身体が原型を留めていたのは奇跡だった。辛うじて残っていた命が尽きる間際、リンは強烈に願う。

(こんなところで…… 死にたく…… ない……)

「出てこい、天使! 我は戦うためにここに遣わされた! 出てこないなら……」

ふと昼間に見た楔十字を思い出した。その下で、神サマなんていないと吠えた。

(ああ…… ちくしょう……)

背にした開かずの扉の向こう側、ちょうど真後ろにあの楔十字がある。距離にして数十メートル。いもしない神との距離を近く感じ、リンは自然と手を組んで跪いた。

「ホントにいるならさ…… あたしを助けてみなよ…… そしたら、また信じてやる……」

なんて捻くれた祈りだろう、と自嘲した。もう二度と神に祈ることはないとしたのに。そもそも、こんな情けない死にかけのお願いを聞いてくれる奴がいるもんか。そう諦めかけていたとき、扉を通して何かがリンの胎内へと潜り込む。

「えっ……?」

臍下にムズムズした感触が宿り、急に視界が暗れた。驚いて腹のあたりを見ると…… 光り輝く楔十字の紋様が浮かび上がっている。リンの全身は煌めく光に覆われ、ひどい痛みが引いて力が漲ってきた。

「なんだこの光は!？」

振り返った拳の悪魔はポカンと口を開けたまま、その場に立ち尽くしてる。

リンの肉体は扉から離れてふわりと地面に着地した。

髪の毛は薄桃色に染まり、服装は身体のラインがはっきり見える白いレオタード衣装に変化している。

左右の太もものホルスターに収まる拳銃は丸みを帯びた独特のフォルムをしていたが、抜いてみるといつも愛用しているものと全く同じ感触だった。腰に手を回すと普段通りの位置にナイフもある。

「これは一体……?」

「そうか! そういうことか! やはりお前は天使だったのか!! これで我の拳が試せるというもの!!」

「あの…… 勝手に盛り上がってないで、事情を知ってるなら説明してくれる?」

「ふはははっ! 天使を折り、聖杯への道を拓く! 我こそが先駆者! その礎となれ!」

まるでこちらの話が耳に入っておらず、拳の悪魔は突進してきた。巨体が一瞬で膨れ上がったように見え、リンは小さ



な悲鳴と共に真横へ逃げる。すると信じられないほどの速度で攻撃をかわし、尚且つ相手の背後を取ることができた。

(身体が軽い!? これなら……)

太もものホルスターから二丁拳銃を抜く。

さっきはまるで通用していなかったが、グリップからは力強い手応えを感じる。

トリガーを引くと吸い込まれるような錯覚を覚えた。次の瞬間には銃口から煌めく光が溢れ、放たれた光条が拳の悪魔の羽を焼く。

「ぐあああっ!? な、なんだと!?!」

(効いてる! 今度はちゃんと効いている!)

迷いや恐怖が薄れ、リンの口元が緩む。自分の肉体に何が起こったのかは分からない。しかし、悪魔を圧倒するだけの力を手に入れたのは紛れもない事実だ。

「喰らいなさい!」

「ぐっ!?!」

銃からは次々と光条が放たれ、拳の悪魔は防戦一方となった。デカイ図体では回避しきれず、かといって直撃しないように腕や羽でガードを固めている。その間にどんどんダメージは蓄積し、ついには片膝を地面に付けた。

(あと少し! あと少しで……)

だんだんと息苦しくなってきた。それでも構わず光の銃を打ち続けるリン。

そうしているうちに、拳の悪魔は太い腕で光条を弾くようになっていた。

「ふむ、ぬるい!」

ついには光が直撃しても平気な顔をするようになった。皮膚を焦がしたまま立ち上がって、のしのとリンの方へ歩いてくる。当然のように逃げようとしたが、リンの身体は異様に重くなっていた。まともに動くことができず、その場でよ



ろけてしまう。

(なんで!? 急に身体が重くなって——)

「力を雑に使い過ぎたな、未熟な天使よ。ふんっ!!」

悪魔が振るったパンチは見えていた。けれど身体が硬直して避けることもできず……リンの腹部に巨大な拳が深々とめり込む。

「ぐげえっ……」

内臓が押し上げられてリンの身体は「く」の字に曲がった。レオタード衣装から豊かな乳房がまろび出るも、羞恥心など吹き飛ばすほどの激痛に襲われる。しかも両手からは武器を落としてしまった。

「お、おええっ……」

衝撃と共に胃液が食道を昇ってくる。涙目で崩れ落ちそうになるも、倒れることすら許されなかった。拳の悪魔はさらに角度を深くしたアッパーカットをリンの腹に喰らわせたのである。

より深い「く」の字に折れ、今度こそ耐え切れなくなったリンは吐瀉してしまった。汚物が白いレオタードを汚し、酸いた臭いがあたり立ち込める。

悪魔がゆっくりと拳を引き抜くと、リンは前のめりに倒れて吐瀉物の上で痙攣した。

勝利を確信してからの惨めな敗北である。あっという間の出来事でリンの頭は真っ白になり、信じられないという顔のまま震えた。

「げぼっ、げぼっ……こ、こんなはずじゃなかったのに……」

「無駄弾を撃ち過ぎて自滅とは笑わせる。お前、本当に刃の悪魔殿が恐れている天使なのか？」

嘔吐した天使を見下ろし、拳の悪魔はつまらなそうに吐き捨てる。

勢いが良かったのは最初だけ。確かに光を放つ拳銃は驚異的だったが、それも使い方がなっておらず命拾いした。逃げなかったという点も踏まえると、この天使の未熟さが透けて見える。

「だから…… うう、げほっ…… 知らないってそんなの……」

「使命に忠実だな。感心する。ならば敬意を評して遠慮なく折らせてもらおう」

「ひいっ……!？」

拳の悪魔は天使の胸倉を掴み、高く持ち上げる。天使は首が締まって地面から離れた足をバタつかせていた。

今度は両頬を殴って頭蓋を歪める。手応えは上々、悪魔の腕力でも容易くは碎けない。むしろ心地よい反動が手の甲に残る。

何度か繰り返されるうちに天使は鼻血が垂らした。頬も腫れ上がっている。

「やめ…… てっ…… ごめんなさいい……」

「殴られている間に喋ると舌を噛むぞ？ 我はそれでも構わんが」

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、許してえ…… ぶへえっ……」

「媚びるな。それでも神に選ばれた戦士か？」

目障りな謝罪を黙らせるために殴る。脳を揺らしたせいかわ、天使の焦点が定まらなくなった。だが「やめて」と懇願だけは続けた。

「ふむ、しぶといな。やはり犯すしかないか…… いや、私の趣味には合わん。拒む女を抱くなどとは」

女の顔を殴り続けるのが果たして良い選択と言えるのか。そんな葛藤は拳の悪魔になかった。ただ己の力を振るうだけ。形通りのバケモノである。

そのうち拳の悪魔は殴り飽きてしまい、苛立ちを募らせていった。

いくらダメージを与えても天使は折れない。あるいは、どうやって折れるかを自らが知らないのかもしれない。

「ええい、時間をかけさせおって」

拳の悪魔はリンの身体を地面に叩きつけ、蹴り上げて仰向きにする。最早、動く力も残っていないと見えた。

「や、やめへえ……」

「終わりだ、天使よ」

呂律の回らなくなった天使の胸を、拳の悪魔は全体重をかけて足で踏み抜く。地面には亀裂が走って、辺りが陥没した。

「ぐへえっ……」

バキバキと肋骨の碎ける感触が足裏に伝わってくる。

カエルみたいに手足を広げたポーズのまま潰れた天使の股倉からは黄金の噴水が弧を描いていた。あまりの衝撃で失禁してしまったのである。吐瀉物の水溜りに続き、今度は金色の水たまりが出来上がった。

殴られ、嘔吐し、盛大に尿を漏らす。

尊厳を失った天使は舌をはみ出した情けない顔で気絶していた。

「こんな程度だったとはガツカリだ。任務もこれで……」

倒れた天使を罵倒していると、拳の悪魔の視界がぐらついた。右側に地面、左側に空が見える。九十度も傾いた世界が何を意味するのかすぐには気付かなかった。

「油断し過ぎだよ」

風が耳を撫でたかと思うと、傾いた世界の隅っこに青い髪の少女が現れる。足元に転がる天使と同様、レオタードのよ



うな白い装束に身を包んでいた。

「て、天使が二人も!？」

「驚くよね。私も驚いている」

「お前は一体、何者なんだ!？」

「りんせいてんし 磷煌天使フェイスリーブ。穢らわしい悪魔、逃がしはしないよ」

フェイスリーブと名乗った少女が目を伏せると、拳の悪魔の視界はついに百八十度まで傾いた。そこで何が起こったのかようやく理解する。

逆さまの世界に、青い血の雨が降り注ぐ。拳の悪魔は自らの巨軀が崩れ落ちていく様を少し離れた場所から眺めていた。その傍らではフェイスリーブが血の付いたレイピアを携えている。

「バカなあ…… いつの間につ!？」

「えっと『ガツカリだ』の辺りかな」

首を切断された拳の悪魔が記憶を振り返ることはできなかった。無惨に転がる頭部を、フェイスリーブは両断し、思考は永遠に閉ざされた。

「さて。悪魔の死体を浄化しなくちゃいけないけど、それよりも……」

フェイスリーブは倒れた拳の悪魔の死体を一瞥し、次に気絶している少女を見る。

薄桃色の髪は次第に色が抜けて黒に戻った。白いレオタード衣装も、外套を纏った黒装束へと変化する。どうやら学園の生徒ではないようだ。

「この子もしかして、砂糖菓子の……」

あのかきは姿を見たわけではない。だが、何となく予感はしていた。また会うことになるだろうと。

「まあ、いいでしょう。回収して学園長に報告しないとね」

リンが目を覚ますと、日の光が見えた。どうやらここはベッドの上らしい。スプリングは硬いがシーツは清潔で、外からは鳥の囁りが聞こえた。

頭の中を整理しつつ身体を起こす。正確な時間は分からなかったが昼前だろう。記憶を遡ってみると腹部にずっしりとした不快感を覚え、吐き気が込み上げてきた。

(あたし…… 聖杯を盗もうとして、悪魔にかち合って、それから……)

あれが本当に悪魔だったのかなんて確かめようがなかった。確かめたいとも思えない。いっそ夢であってほしい。

身体を見下ろすと薄手の白いシャツだけ着せられていた。勿論、自分のものではない。次に手を眺めて、肩や腹も確認した。あちこちに痛みが残っている。皮膚の下で内出血している箇所もあった。

「痛い……」

どうにかベッドから降りて自分の荷物を探したが見当たらない。着ていた服だけは枕元に畳まれている。仕方なく窓の外の様子を確かめた。すると見覚えのある背の高い鐘楼が目に入る。

(まだ聖イリス修道学園の中ってワケね。ここは保健室かな)

悪魔がどうなったのかは分からないものの、とりあえず生きている。ということは自分は誰かにここまで運ばれ、手当を受けたということだろう。

(荷物は惜しいけど、捕まるわけにはいかない。さっさと逃げなきゃ！)

急いで脱いで着替える。すると下腹部に強烈な違和感を覚えた。驚いて裸の腹を触ってみると甘ったるい熱が籠っている。そのまま下腹部を弄りたくなるような…… 退廃的な興奮がリンの頭を過った。

「これは…… 聖堂のあったシンボルと同じ……」

臍下には楔十字の紋様が浮かび上がっている。擦っても消えないが、刺青とも違うようだった。

(今は時間が惜しい。気になるけど……)

気持ち切り替えたリンは衣服を着て窓から飛び出た。幸いなことに保健室は一階で、周囲に人の気配も無い。もう聖杯を盗むという計画は破綻している。急いでここから離れないとどうなるか分かったものではない。

学園の敷地を囲う壁へ向かって走り、穴の空いた箇所から逃げようとしたそのときだった。

腹部の紋様が妖しく輝いたかと思うと、股倉から潮を吹いてしまったのである。

「あひいひいひいっ♡」

太ももを動かすだけで絶頂してしまう。とにかく女性器が敏感になっていた。それも何の前触れもなく。

下着を濡らしてしまったりリンは壁の前で倒れ込む。それだけでは済まず、膣からはとめどなく愛液が溢れてきた。

慌てて手で抑え込むも、クリトリスと指が触れてしまったせいで再度の絶頂を迎えてしまう。

「んひいっ♡ な、何これえっ♡ お、おっ、オマンコがあ…… 気持ちよくてえ♡ お、お、お汁が溢れてりゅうう♡」

どうにか立ち上がったが甘ったるい嬌声が漏れ、屋外だというのに割れ目を指でなぞってしまった。大きく股を開いて秘部を突き出し、貪るように指先で陰唇を刺激する。

それだけでは我慢できなくなり、片手の指でクリトリスを摘み、もう片方の指を膣口に突っ込んでグジュグジュと掻き回してしまった。

「な、なんでえ?! こんなトコでオナニーしちゃうのおお♡ んひいっ♡ と、止まらないいっ♡」

何度も、何度も軽い絶頂を繰り返す。こんなところを誰かに見られてしまったらと想像するだけで恐ろしくなった。けれど、手を止めることができない。まるで子宮の奥底から疼いているかのようだ。

「い、イグう♡ 屋外オナニーでイグうう♡」

ひととき大きな嬌声をあげ、潮吹きをしたリンはようやく正気に戻れた。身体の火照りはなかなか冷めず、力尽きてそ

の場にへたり込んでしまう。

(な、何なのこれ!? 逃げようとしたら急に子宮がキュンキュンして……)

「天使は聖杯から遠く離れることはできません」

不意に背後から声がして、背後を振り返る。さっきまで人間の気配なんてまるで無かったが、そこにはスーツ姿の女性が立っていた。

年齢は三十歳くらいだろうか。顔貌の整った知的な美女だが、どこか冷たい印象を受ける。痴態を晒したリンは血の気が引いた。しかし、どうやっても取り繕えそうにない。最低限の強がり、蕩けた目のまま女性を睨みつけて尋ねる。

「……あんた、誰? つーか、見てたの?」

「私はイリス。この学園の学園長を務めています。ああ、自慰行為に関しては気になさらないでください。そういうものだと理解しています」

優雅な動作で胸元に手を当てたイリスは、リンの目をジッと見つめてきた。名乗れという圧を感じて「あたしの名前はリン」とだけ答える。

「そうですか。では、リンさん。支度ができたら学園長室に来てください。あなたにとっても大事な話があります」
「断ると言ったら?」

不躰な態度に腹が立ち、瞬間的に反発してしまった。だがイリスは意に介した様子もない。あくまで冷静に返す。

「構いません。ですが学園から出ようとするとする度に、女性の部分が疼いて満足に動くことができなくなります」

「バカじゃないの? どんな呪いのよ……」

「呪いではありません。力を得たことによる副作用と呼ぶべきでしょう」

「とりあえず分かったわよ。けど、このままじゃお漏らししたみたいなんですけど」

「別の服と下着を用意させましょう。着替えには保健室を使って構いません。シャワーもありますから、どうぞご自由に」

濡れた衣服をさっさと交換したリンは警戒を緩めないまま学園長室に入った。そこで、あらためてイリスと向き合うことになる。応接用のソファに座るように促され、意外にも飲み物まで用意してもらえた。ひとつのポットからふたつのカップへ紅茶が注がれ、なんとも良い香りが立ち昇る。

「どうぞ。遠慮せずに」

カップを持ち上げたリンは手を付けない。イリスは先に紅茶を飲んでみせた。毒など入っていないとアピールしたいのだろう。

「今日は良い天気ですね。ここ山中で天気が崩れやすいのですが、山頂にかかる雲を見るとしばらく快晴が続くと思われます」

「世間話をするためにあたしを呼んだわけじゃないでしょ？」

「その通り。答えられる範囲で質問に答えます。それから本題に入りましょう」

「あなたは、あたしに何をさせたいの？」

悪魔について聞いてくると予想していたイリスは少しだけ眉を吊り上げた。リンがいきなり核心部分に踏み込んできて、どう答えるかを考えている。

沈黙は重苦しかったが、リンはイリスの顔から視線を逸さなかった。

「本題から入ったほうが良さそうですね。あなたにも聖杯を守っていただきたいのです」

「あたしが何をしにここへ来たのか知らないんだ？」

「知っています。預かった荷物の中身を調べさせてもらいました。聖杯を盗もうとしたことは不問にしましょう」

やはり、バレている。想定はしていたから表情に出さずに済んだ。しかし、不問にした上で聖杯を守ってほしいとはどういう意味なのか。イリスは小さくため息を吐き、窓の外へ視線を移した。

「あなたは、この地に根付いた聖杯に選ばれたのです」

「なにそれ？」

「聖杯の力を得て、天使に変身したあなたは拳の悪魔と戦いました」

悪魔という言葉を目にしたリンは心臓がギュッと締め付けられた。全身を叩きつけられた痛みが鮮明に蘇り、鼻腔に血の臭いが充滿する。無意識に忘れようとしていたものが心へと重くのしかかって、そのまま押し潰されそうだった。

同時に、自分が二丁拳銃を手に悪魔と戦った記憶が蘇ってくる。

最初は押ししていたのに経験不足と油断から一気に窮地へと陥ったのだ。こうして生きている理由はわからなかったが、死ななかつただけマシというものだろう。

「説明して。聖杯ってなんなの？ ただの骨董品じゃないの？」

「二千年前に神の子の涙を受け止めた聖遺物……それが聖杯です。その頃より悪魔たちは大いなる力を持つ聖杯を狙ってきました。奴らの手に渡れば悪用され、人類に恐ろしいことが起こります」

「バツカみたい。まるで御伽話じゃない」

「これは神話です。聖杯は自身を守るべく、力を与えるに相応しい人間を選びます。選ばれた人間は死を乗り越えて天使へ転生し、悪魔と戦う力を身につけるのです」

「じゃあ、あたしは天使様になつたワケ？」

こんな三文小説の内容を聞かされるのはたまったものではない。だが、身体が重くてソファから立ち上がれなかった。おそらくイリスは真実を話している。リンの中の断片的な記憶が彼女の正しさを証明していた。だが、それを否定したい自分がある。

「あなたの身体にも聖痕が現れたはずですよ。どこかに楔十字の紋様があるでしょう？」

咄嗟に臍の下を押さえてしまった。妙な紋様が描かれていたのは事実である。

リンは己の内側に確かな新しい力を感じるようになっていた。血液のように全身へ流れる神聖な存在が確かに在る。そ

それは昨日までは存在していなかったのに、ずっと一緒にいたかのようだった。

(本当に、あたしに聖杯の力が宿っている?)

だとしたら怪我の功名だ。

物体としての聖杯は盗めなかったが、代わりにすごいものを手にしたのである。臆気な戦いの記憶によれば、リンは圧倒的な能力を手に入れた。

「覚えておいて下さい。天使の力は聖杯を守るためのもの。人間を傷つけるような使い方はできません」

釘を刺すイリスだったがリンの耳には入っていない。

だからか、最も効果的な言葉を選んで警告を放った。

「聖杯は現世の写し鏡となる『結界』に守られています。天使はその使命において聖杯から離れることはできません。つまり、あなたはこの学園から出られないということですよ」

「へっ?」

「繰り返しますが、人間を傷つけるような悪用はできませんし、この学園から出ることもできません。先ほど学外へ出ようとしたときのことを覚えていませんね」

「ちょ、ちょっと待ってよ! じゃあ、こんな辺鄙な場所で暮らせているの!?!」

学園から出られないと聞いた途端に青褪める。神の信徒ではないリンにとってここは退屈極まりない。

「生活については心配しなくても平気です。あなたには生徒として編入してもらいます」

「勝手に話を進めないで! そんなの納得できるわけないでしょ!」

「過去に天使となった者たちは皆、生徒としてここで暮らすことになりました。その事例に従ったままで。衣食住が保証されるといえるのは悪い条件ではありませんよ」

「ぐっ……」

もったもな意見と理不尽さに板挟みになった。リンは考え込んで、どうするのが最も得なのか答えを弾き出す。悪魔と戦うなんてゴメンだ。けれど天使の力は欲しい。

（この力さえあれば、占領軍の連中とだって戦える。せこく盗んで困らせる必要なんてない。思いっきり…… だから今は大人しくしておこう。チャンスが来たら、こんな学園から逃げ出してやるんだから！）

しばらく考え込んだフリをしたリンは目に力を入れ、立ち上がってみせた。いかにもやる気があると言わんばかりの外面と、それとは正反対の心で宣言する。

「分かったわ。悪魔をやつつければいいんでしょ？ やってやるわよ」

「では、決意が固まったところであなたの先輩となる天使を呼びましょう」

「先輩？」

訝しんでいるとイリスは指を鳴らす。

すると学園長室の扉が開いて、車椅子が入ってきた。押しているのは黒い制服の少女で、ペコリとお辞儀をしてすぐに出ていってしまう。

「残されたもう一人を目の当たりにしてリンは固まってしまった。」

「目に包帯を巻かれた欠損少女……」

「あなたは……」

「また会えたね」

「紹介します。彼女の名前はレニ。昨晚、悪魔を打ち倒してあなたを救いました。聖杯に選ばれた神の戦士です」